▼木谷勤先生を偲ぶ

木谷勤先生は昨年の九月一五日にその生涯を終えられました。木谷先生はドイツ現代史研究会とドイツ現代史学会の発足当初から、創立メンバーの一人として同研究会・学会の発展に尽力されてきました。悲しいことですが、その木谷先生の端正なお姿に接することは、もうできません。ここに、以下の四つの論考を掲載し、木谷先生のお仕事とお人柄を偲び、木谷先生の追悼記念といたします。

（編集委員会）

木谷勤のドイツ近現代史研究と「世界現代史」

若尾祐司

1　はしがき

ドイツ近現代史研究者の木谷勤氏は、一九二八年四月香川県多度津の三六ヘクタール規模の大地主・木谷家の四男に生まれ、『もう一度読む　山川世界現代史』（山川出版社、二〇一五年）を遺作として、二〇一八年九月に逝去された。

同氏は、終戦の年、高松中学を卒業して岡山の旧制第六高等学校理科に進学された。しかし、一九四五年七月四日高松空襲で自宅が焼夷弾の直撃を受け、家族四人を失い、自身も重症を負い、左上腕の切断を余儀なくされた（詳細は二〇一四年著書、二四一～二四二頁）。一年の休学の後に復学されたが、実験や製図のある理系は困難と考えられ、文系に志望を変更されて一九四九年東京大学西洋史学に入学された。一九五二年に同大学院に進学され、同時に小石川高校の講師を勤めながら、一九五三年論文「初期資本主義と問屋制工業」で歴史研究者の第一歩を記された。

この一九五三年論文に始まる同氏のドイツ近現代史研究は、誰もが認めるその温厚な人柄とは逆に、またその表現の穏やかさとは異なり、内容に即してみれば極めて論争的で、孤高の性格を特徴としている。さらに、専門分野でのこの論争的な歴史研究にとどまらず、「世界現代史」の概説書を単独で執筆するという困難な課題を果たされ、高等学校の世界史教育や一般市民の歴史学習に直接に貢献する道を示された。すなわち、山川出版社の世界現代史シリーズにおける、各国別の全三六巻に続く第三七巻『世界現代史』（一九八五年）の第二部「現代世界の展開と変動」であり、またこれをリライトした上記の遺作である。

近年、従来のナショナルー・ヒストリーの枠組みを超えて、グローバル・ヒストリーへと向かいつつ、その研究成果に基づく新たな世界史像の構築が模索されている。例えば、羽田正『グローバル化と世界史』（山川出版社、二〇一八年）である。そうした動向に触れるとき、ドイツ近現代史研究を世界史の歴史教育につなごうとした木谷「世界現代史」は、明らかに先駆的な役割を果たしている。以下、同氏の幅広い研究の一端に触れうるにすぎないが、そのドイツ近現代史研究を振り返りつつ、木谷「世界現代史」の特徴と意義を考えてみたい。

2　木谷・ドイツ近現代史研究の主題

木谷・ドイツ近現代史研究のテーマ群は、四つの主題にまとめられ

る。第一は最初の作品で、二十代半ばの『思想』論文、ニーダーライン問屋制家内工業の研究である。第二は、三十代でのユンカー層とドイツ政治の関係性に関する研究であり、第三はその後のドイツ第二帝政の歴史的性格規定、およびその特質としてのボナパルティズム論である。第四は学説研究であり、これと関連する翻訳書の刊行である。

まず、第一の主題は近代資本主義形成史論であり、一九五〇・六〇年代に支配的となっていた大塚史学への批判的な対置であった。すなわち大塚史学は、問屋制家内工業から機械製工場へという従来の「マニュファクチュア時代」論を否定し、問屋制（商業資本）に対抗してギルド規制外の農村に台頭した分散マニュファクチュア（農村の織元）に、近代産業資本の担い手を見た。この見解に対して木谷（以下、敬称略）は、①一八世紀から一九世紀前半のニーダーラインでは、麻織物業など問屋制の下で農村家内工業が広範に成長すること、②その問屋商人から産業資本家が形成されることを実証的に検証し、さらに③麻織物業発展のきっかけは、アメリカにおけるプランテーション奴隷労働者の服地需要にあったことを指摘した。こうして、後のプロト工業化論につながる初期資本主義の理解が、ここにいち早く提示されている。

そうした資本主義形成史の理解は、松田智雄の著作に対する一九六八年書評でも貫かれる。一八二〇・三〇年代ヴュルテンベルクにおける「工場マニュファクチュアの聳立」という松田の結論に対して、しかしその中身は機械製工場から問屋制家内工業まで極めて雑多であり、ここでも産業革命の推進者は「技術者的工場生産者類型」というよりも、問屋制企業のカルヴァ取引会社などであった、と。

木谷の松田批判は、レオ・ヒューバーマン著作の一九五三年書評ですでに示されていた。そこでは、P・スウィージーと重なる同書の資本主義発達史論に対し、松田は「孤立した少数派」と評したが、この指摘は「多少独断に過ぎ」、「大塚史学に対する反対意見は理論的にも事実の上からも多数出つつあるのは周知の通り」（八三頁）と。そして、「飛びついて読んだ」同書の社会経済関係の叙述（上巻）および経済学説の変化・発展の解説（下巻）について、「これほど生き生きと書かれているのは驚き」と記している。同書の影響を大きく受けて木谷は、①「抽象的な概念や類型ではなく」、「史料を使って」、「目前の利害のために動く人間の意識や行動のジグザグ・コースの中に実現してゆく」歴史の複雑さを具体的に検証する研究（同前頁）、および②学説を系統的に押さえる作業へと導かれた、と思われる。

したがって第二に、大塚史学の関心が資本主義形成史から産業革命史へと移っていく一九五〇年代末から一九六〇年代、木谷の研究関心はむしろ社会経済史から離れ、経済的利害関係と政治の相互関係を問う、利益政治（インタレスト・ポリティクス）の具体相を解明する研究へと向かう。すなわち、東部大土地所有者（ユンカー）によって、どのように、どの程度ドイツ政治が左右されたのか、まず「鉄と穀物の同盟」というビスマルク関税政策の内実を問う作業である（一九五八年『歴史学研究』論文）。ついで、一九三二年ブリューニング失脚に果たしたユンカーの役割である（一九六二年『歴史学研究』論文）。この問題について、ここでは消極的な回答が与えられていた。しかし、一九六二年秋からのハイデルベルク大学滞在で内相W・v・ガイル男爵（東部大土地所有者）の関係史料を発掘し、ガイル男爵ら東部大土地所有者のヒンデンブルク大統領への働きかけがあったとする、肯定的な結論へと変更される（一九六六年ZAA論文、また一九六六・六七年『史学雑誌』論文）。

そして、こうしたビスマルク利益政治の研究成果を踏まえて第三の主

題がまとめられ、一九七七年の主著『ドイツ第二帝制史研究』が上梓される。いわば伝統的な労農派と講座派の「社会構成体」移行論・ブルジョワ的転換の画期論に割り込むもので、一八四八年革命と一九一八年ドイツ革命の間にあって、一八六六～七一年の「上からのブルジョワ革命」テーゼを主張した。その「支配体制」がボナパルティズムであり、ユンカー・貴族が権力の中枢にありながら、ブルジョワジーの利害に沿って統治する体制であり、ブルジョワジーの「間接的支配」とする第二帝政理解である。

この見解は、激しい議論を呼んだ。しかし、今となっては、「ブルジョワ的転換」の画期をなす政治的近代化（市民革命・民主化）と経済的近代化（産業革命・工業化）について、両者の平行的進行は第一ランナー（英、米、仏など）の例外的現象にとどまったことは明確である。むしろ、第二ランナー（独、露、日など）では市民的変革を封じての王権と大土地所有者支配下での工業化であり、さらに韓国や台湾、そして現在の中国などの第三ランナーではいわゆる「開発独裁」の下での工業化が目立っている。いずれにせよ、政治的自由や民主化とは敵対する、反動政治・強権政治による経済的近代化の推進である。このような政治的近代化と経済的近代化のねじれ現象という、一九世紀後半以降における後発国や旧植民地諸国工業化の一般的な特徴を見るとき、ブルジョワ的転換の画期を世界史レベルではなく、国民国家レベルで問うことにいかなる意味があるのか、疑問となろう。この点で、木谷の主著は、「ブルジョワ的転換の画期」をめぐる研究の形を取りながら、むしろ戦後わが国のドイツ近現代史研究において、事実上、この議論の幕引きの役割を果たす著作であった、と考えて良いように思われる。

他方、第四は学説史であり、同時代の旧西ドイツの研究動向に即して進められている。その第一は、ドイツ帝国主義の戦争目的政策に関するフリッツ・フィッシャーの研究であり、その画期的な成果のみならず、「フィッシャーの社会学的方法」への注目である（一九七〇年紀要論文および一九七一年『歴史評論』論文）。すなわち、政治の力と経済の力、その二つの純然たる相互関係を検討する立場であり、これにより両者のダイナミックな相互作用をとらえることができる。これが、「新しい社会史」の立場であり、政治史中心のドイツの伝統史学に対し、「思想・経済・政治の綜合的把握」を試みる社会史である、と。このように整理されたフィッシャーの「新しい社会史」の立場から、木谷はドイツ第二帝政研究への自らの方法的立場を引き出していたと思われる。

つぎに、H‐U・ヴェーラー『ドイツ帝国』（一九七三年）をめぐるヴェーラー論争であり、ヴェーラー批判とヴェーラーの反批判が丹念に整理される（一九七九年『歴史評論』論文）。木谷の最大の関心事は、自らの第二帝政＝ボナパルティズム（ブルジョワ国家）論と関連し、第二帝政の憲法・政治体制をめぐる論争である。ヴェーラーは第二帝政を「半絶対主義的外見的立憲制」とし、その運用実態をビスマルクのボナパルティズム独裁から、皇帝ヴィルヘルム二世時代の「権威主義的多頭政治」「調和なき多党政治」と区別する。これに対して、L・ガルはボナパルティズム論を全面否定した。この論争を紹介しつつ木谷は、ヴェーラーのボナパルティズムに関する基本的な考え方に注目している。すなわち、この概念は経済的な「発展過程での独裁」を構造機能的に解明するために有用であるが、それをファシズム現象や第三世界の独裁政治にまで適用できるのか、この点についてヴェーラーの立場は懐疑的である、と（同上、四三頁）。

この時代、まだ「開発独裁」という用語は登場していなかった。しか

し、現在ではこれを踏まえて、一九世紀後半のボナパルティズム（産業資本主義確立期）、二〇世紀前半のファシズムと「プロレタリア独裁」（第一次世界大戦後の工業再建・高度化期）、そして二〇世紀後半の開発独裁（旧植民地諸国の独立と工業化）へと、工業化を担った強権政治の軌跡をたどることができる。木谷の問題関心も、ボナパルティズムやファシズムといったカテゴリーを、後発国の近代化コース「上からの革命」における政治と経済のズレの問題として、その構造的なゆがみの歴史的発現形態として把握しようとするところにあったと思われる。ただし、この問題を深めるべく、ファシズムやナチズムの研究へと木谷が向かうことはなかった。

むしろ、研究の焦点は第二帝政論に置かれ続ける。同年の別稿で木谷は、上記のヴェーラーの統治形態二分論に対して、自身の見解を堅持している。すなわち、ヴィルヘルム二世の「親政」や、とりわけヒンデンブルク／ルーデンドルフの「最高司令部」に「一種のボナパルティズム権力の機能」を見ることができる、と（一九七九年『歴史学研究』論文、四四頁）。その後も、このヴィルヘルム時代の支配体制に集中し、M・R・レプジウスのミリュー論による多党政治の社会的基盤の説明（一九九一年『世界史への問い』論文）や、R・J・エヴァンズ、G・イリーら「下からの社会史」学派の「民衆の社会的動員」といった新しい研究に依拠して（一九九一年『権力・知・日常』論文）、政治体制の変質過程を検証する作業が進められる。

それらに続き、一九九二年の論文「現代歴史学論争――ドイツ近現代史の見方ととらえ方」は、一九・二〇世紀ドイツの近現代史研究を、総括的に跡付ける。その項目は、①「歴史主義」（伝統の重み）、②フィッシャー論争（戦後西ドイツ歴史学の新生）、③ヴェーラー論争（「社会史」対「新歴史主義」」、④「特有の道」論争（「下からの社会史」からの批判）、⑤「歴史家論争」（「過去の克服」をめぐる争い）、⑥ドイツ統一と歴史学、という展開である。ここでは、現在に至るまでドイツ歴史学の基調は、L・v・ランケに発してH・トライチュケの急進国家主義的プロイセン・ドイツ史叙述に継承され、その後の専門歴史学を覆う保守的な外交・政治史中心の、歴史主義の伝統にあることが明確に示される。

しかし同時に、J・ブルクハルトの文化史に始まり、文化・社会科学の多様な問題関心や方法を取り入れる、より総合的な歴史叙述を目指す試みがあったこと。その上にフィッシャーやヴェーラーらの「社会史」・「社会構造史」が提起されてくる経緯が丹念に示される。さらに一九八〇年代の初め、英米などとは異なり、市民革命を欠く工業化という政治と経済のズレにナチズムへの歴史を見る、ヴェーラーら社会構造史のドイツ「特有の道」テーゼに対する、英米の「ニューレフト」歴史家からの批判、またナチズムという暗い過去の清算を目指す動きから生じた、一九八〇年代後半のマスコミを巻き込んだ「歴史家論争」について詳述される。

そして、これら戦後西ドイツの歴史学における四つの論争について、以下のように総括される。すなわち、そうした論争が生じたのは、西欧世界の一員としての西ドイツに民主主義が定着し始めた一九六〇年代以降のことであり、結局は、この過程への歴史学の適応の方向性の問題であった、と。

以上のような、ドイツ歴史学の全般的な跡付けの中でも注目されるのは、いち早く木谷が、戦後に大きな影響力を持ったW・コンツェ、O・ブルンナー、T・シーダーらの「構造史」「社会史」について、「視点と

方法の斬新さにもかかわらず、古い政治姿勢と価値観が連続していた」（二五二頁）ことを指摘している点である。とりわけ、コンツェは木谷とってハイデルベルク時代の恩師であり、コンツェ著の邦訳書『ドイツ国民の歴史』（一九七七年）の「あとがき」で、「伝統歴史学の価値を守りながら」「時代の変化に応じて『社会史』を切り拓いていこうとする」「穏健な保守主義とでもいうべき立場」（二〇三頁）と、コンツェの歴史学を特徴付けていた。

しかし、ドイツ統一後に東側の文書が開かれ、コンツェはシーダーと共にナチ党員の過去を持ち、「東方研究」に関わってユダヤ人迫害に加担したこと、そうした過去を「封印」して戦後の再出発を果たしたことが明らかにされる。こうして、歴史学の内部における「過去の克服」が、一九九〇年代後半にはドイツ歴史学界の最大のテーマとなった。この関連で、木谷のイニシアチブでP・シェットラー編『ナチズムと歴史家たち』（二〇〇一年）が翻訳・出版される。ナチスの栄光の日々から崩壊へ、連合軍の占領下で「歴史家ツンフト」は「非ナチ化」の嵐をやり過ごすため一体となって協力し、米ソ冷戦の中でその過去は封印された。そして半世紀が過ぎ去り、世紀末にようやくその封印が解かれた。このナチ期と戦後の連続性、および学問と政治の関係性をめぐる議論は、それ自体が今後に深められなければならない課題である。しかし同時に、こうしたドイツの歴史学における過去の詮索は、そのまま日本の歴史学への問題提起でもあり、戦中から戦後へと日本の歴史学はいかなる役割を果たしたのか。日本の歴史学にあっても「過去の克服」が問われるべきと、木谷は「訳者解説」を結んでいる。

3　木谷「世界現代史」

以上に見てきたような近現代ドイツ史研究と同様、木谷「世界現代史」への出発点も二十代半ばのことであり、一九五三年『世界史潮』書評にまでさかのぼる。同書は戦後歴史学のエッセンスを盛り込んだ教養書であり、井上幸治、遠山茂樹、村瀬興雄、矢田俊隆、江口朴郎、岩村三千夫ら中堅・新進の手になる世界史概説で、近現代史に重点が置かれた。木谷は、「全巻を通じてアジアとヨーロッパの歴史をいかに一体化して世界史とするかで大きな努力」が払われ、「現代に入ってヨーロッパとアジアの関係は、帝国主義と植民地民族運動の問題としてのべられ」「日本の歴史および現状を世界史の中で位置づけることに成功した」（八二頁）と、高等学校の現場教員としての共感をこめて本書を評している。

本書における世界現代史の叙述は、帝国主義と民族解放運動の対抗軸にそって展開される。その場合の「現代」という時代の歴史認識は、レーニン帝国主義論に依拠している。ほぼ一八七〇年代後半以降の資本主義の最終段階としての独占資本主義段階であり、独占資本と金融資本の寡頭政治であり、これに対抗する社会主義と民族解放運動の成長である。つまり、社会主義社会への移行期としての帝国主義時代である。

一九四九年の中華人民共和国建設という印象的な出来事の下、『世界史潮』の「おわりに」の最後は、文字通り「新しい人間像」の小見出しで結ばれる。「人間が商品化し、個性や人格の自由を失っているということは、人間の本性でないとすれば、新しい人間は資本主義社会からの解放によって生まれてくるものではないか。人間の人間による搾取を排しつつあるソ連、中国のような社会主義や新民主主義の国家にお

いて、欧米の個人主義とは異なった新しい人間像の出現が期待される」（二九九頁）と。

換言すれば、物質的豊かさの中で「思想と個性を失ったアメリカ的人間像」に対して、「自己の個性に応じて人民大衆のために謙虚に使える人間」の対置である（三〇〇頁）。同様に、政治体制についても「大企業のデモクラシー」と化したアメリカ・デモクラシーに対して、社会的平等に立脚するもっと「実質的な民主主義」が対置される。そして、そうした「未来性をはらむ社会や文化は、世界平和の中においてこそ成長してゆくのではあるまいか」と結ばれる。こうした社会主義への移行期としての同時代認識は、単に日本のみならず、この時代に広く共有された「世界思潮」だったと言ってよいであろう。

さて、この書評の翌年から木谷は、福井大学教育学部に一六年半、大阪教育大学教育学部に一三年半、合計三〇年間、教員養成学部に所属した。この一九五三年書評当時の、小石川高校での高等学校における世界史教育の担当に始まり、教員養成学部での三〇年間を通じて、木谷は高等学校の世界史教育に役立つ参考書の必要性を意識し続けたと思われる。それは、単なる事項の羅列ではなく、『世界史潮』の現代史像を踏まえつつ政治と経済の関連を軸に、筋の通った世界現代史のイメージが得られるテキストである。そのことが、山川出版社の「世界現代史」企画三七巻の第二部「現代世界の展開と変動」の執筆へと向かわせた誘因だったと思われる。まさしく、総括的な世界現代史を単独で叙述するという、困難な課題への挑戦であった。

その試みは、以下の一〇章よりなる。①帝国主義時代の開幕、②植民地での従属と抵抗、③第一次世界大戦の激動、④ロシア革命とヴェルサイユ体制、⑤民族解放闘争の展開、⑥「危機の二〇年」、⑦第二次世界大戦での破壊と建設、⑧戦後世界の展開、⑨現代世界の多極構造、⑩現代世界の危機――飢餓と核戦争の脅威、である。対象となる時期は一八七〇年代から一九八〇年代まで、百年余のタイムスパンであり、基本的な視点は『世界史潮』を継承して、帝国主義と民族解放運動の対抗軸に沿っての展開である。第八章までは、章編成と筋立ても『世界史潮』とほぼ重なり合っている。

異なる点は、第一に、欧米と東アジアの関係史のみならず、アフリカ、南米、オリエントも組み込み、ほぼ全地域を包摂する世界史であること。ただし、日本の記述は、世界史教科書との結びつきを考慮して削減され、小見出しで四項目分の最小限に限定されている。第二に、レーニン帝国主義論というよりも、I・ウォーラステインの世界システム論をベースに置き、中心と周辺、そして半周辺、さらに先進諸国の内部における両極化現象を追跡している。つまり、資本主義の賃労働という中心に対して、モノカルチャー化と奴隷労働の周辺、そして分益小作制の半周辺という、相関編成の遺産が帝国主義時代の出発点をなす。

第三に、スターリン批判、チェコ事件、中国の文化大革命といった一連の事件を経て、ソ連や中国など共産主義の「新しい人間像」への期待は消え失せる。社会主義建設および民族解放運動とも、その「ジグザグのコース」が実態に即して叙述される。第四に、「社会主義的近代化」、これに対抗するロストウ路線による「中進国」製造業の成長、そして知識・技術産業に特化する先進国といった、一九六〇・七〇年代における新たな世界経済の展開である。第五に、第三世界における中進国と最貧国との新たな格差化と飢えの構造化の問題であり、その上でなお軍事費増加の浪費が進む現実であり、「軍拡と飢えの悪循環を断つことが最大の課題」と結ばれる。

この一九八五年の「現代世界の展開と変動」から三〇年後の二〇一五年に、単著『世界現代史』が出版される。この間に、歴史上の大きな変化があった。第一に、一九九〇年前後のベルリンの壁の崩壊と東西ドイツの統一、ソ連と東欧共産圏の解体である。第二に、米国における一九九〇年代コンピュータ技術から二一世紀初めのインターネット技術開発へと、電子・情報分野の技術革新による経済構造の変化であり、そして第三に、中国における一党支配下での市場開放政策による高度経済成長、これとは対照的な日本経済の長期停滞傾向やヨーロッパにおけるEUの成立とその困難である。さらに、宗教的原理主義とナショナリズムの台頭も、最近の特徴的な動向であろう。

こうした変化に触発され、新たな世界現代史像を模索する努力も、この間に多々なされている。その初期のものと、最近のものを挙げれば、初期のものとしては例えばロシア現代史家の木村英亮『二〇世紀の世界史』（山川出版社、一九九五年）が挙げられる。この木村の著作は、一九五三年『世界史潮』の認識枠組を基本的に継承している。すなわち、二〇世紀は列強帝国主義が互いに戦い、その支配に対し民族解放と社会主義運動が戦ってきた百年間であった。ロシア革命から民族解放運動は多くを学び、ほとんどの民族が独立を果たした。だが、南北格差は拡大し、従属が固定化している。たしかにソ連邦は解体したが、その掲げた理想、さまざまな試行錯誤は人類共通の財産である、と。

つまり、二〇世紀は資本主義の時代であり、それは利潤目的の追求で合理的な体制であり、社会主義の実験は失敗した。しかし、一つの運命共同体となった人類の、平和、環境、貧困の問題の解決は、この体制に期待することはできず、むしろ社会主義の理念・歴史を問い直すことに求められるべきであろう、とする見解である。

他方、最近のものとしてはイギリス現代史家の木畑洋一『二〇世紀の歴史』（岩波新書、二〇一四年）が挙げられる。木畑は、一八七〇年代から一九九一年南アフリカのアパルトヘイト終結宣言までの時代を、「長い二〇世紀」とし、これを帝国主義の時代と規定する。そして、植民地支配と抵抗、脱植民地化の過程をアイルランド、南アフリカ、沖縄の定点観測で検討し、暴力支配とその排除のプロセスとして、この時代の特徴をとらえる。つまり、たしかに暴力支配は終わらないが、一九九〇年代初めには帝国主義は過去のものとなった、と。そして、それ以降は暴力支配というよりも、むしろ格差化を広げるグローバリゼーションが問題であり、「平等と平和の時代」に人々の努力でこの格差化は押し戻せる、と結ばれる。

さて、こうした歴史的変化や議論を踏まえて、木谷の二〇一五年遺作はどのような現代史像を提示するのか。以下、一九八五年の叙述と比較しつつ、遺作となった二〇一五年『世界現代史』の特徴を見ておきたい。

第一に、本書は一九八五年共著の担当部分をリライトし、簡潔化し、高校生や教員に広く読みやすいように工夫されている。

第二に、重要と思われる概念や事項を、コラムにまとめ、理解しやすくしている。すなわち一六項目のコラムであり、①「近代世界システム論」、②帝国主義という言葉、③世界は一つに、④インド鉄道、⑤南アフリカ戦争、⑥明治国家の「脱亜入欧」、⑦オスマン帝国の革命、⑧都市と農村、⑨ナショナリズム、⑩だれが戦争を始めたか、⑪革命家レーニン、⑫「非暴力抵抗」、⑬パレスチナ問題、⑭中東戦争、⑮デタントと軍拡、⑯九・一一同時多発テロ事件、である。見られる通り、第一次世界大戦までの時期が一〇項目、以後が六項目であり、日欧米関係の事項は七項目にとどまる。

第三に、もちろん、この三〇年間の直近の時代の叙述が追加される。第十章「冷戦の終結とグローバリゼーション」であり、①社会主義の崩壊、②帝国の解体、③グローバリゼーションと世界経済、よりなる。その主要な内容は、まず帝国の時代の終えんである。ソ連はロシア中心の巨大な帝国であり、アフガニスタン介入で崩壊の道をたどり、続いてアメリカもその成功の頂からイスラム世界への介入で破綻し、もはや自国を「帝国」と見なす誇りも消滅した、と。また、グローバル化により南北の格差はやや縮小したが、その差はなお大きく、加えて先進諸国の内部で所得格差が急速に拡大している、と。したがって、「帝国」の時代は過去のものであり、現在の主要な問題はグローバル化による格差拡大にあるとする理解は、木畑の見解と完全に重なる。

しかし、結びの言葉は木畑の展望とは異なる。そこでは、新たな「世界現代史」像への課題が、以下のごとく提示されている。「グローバリゼーションは工業化の世界的広がりを通じて、公害、環境汚染、酸性雨、生物多様性の破壊など深刻な環境問題をつぎつぎと生み出している。将来こうした問題への積極的取組なしに、人類はじめ生命はこの地球で生き残れない。人類がこれらの問題にいかに取り組むかを明らかにすることも、つぎに書かれる世界史に委ねられた課題と言えよう」（二四七頁）と。

換言すれば、工業化の世界的広がりと地球環境危機を基軸に置く、イデオロギーを超えた世界現代史を提示することこそ、次の歴史家世代に求められる課題であるとする、木谷の結びの言葉である。

第一ランナーから第二ランナーへ、さらに第三ランナーから第四ランナーへと続く工業化の重圧に、果たして地球環境は耐えられるのか。工業化と科学技術的進化のグローバリゼーションの歴史を、批判的視点で見直して叙述される世界現代史こそ、次の課題であるとする提言と受け止めてもよいであろう。まさしく、現代技術の精華の一つである、爆撃の傷の痛みを背負って生涯を生き切った木谷の遺言である。

参考文献（木谷勤著作）

一九五三年「初期資本主義と問屋制度」『思想』第三四四号。

（同）　書評「レオ・ヒューバーマン　資本主義経済の歩み」『歴史評論』第四七号。

（同）　書評「野原四郎・井上幸治・山上正太郎編『世界史潮――現代の理解のために』」『歴史評論』第四九号。

一九五八年「一八七九年の関税改革とビスマルクのインタレスト・ポリティクス」『歴史学研究』第二一八号。

一九六〇年「ビスマルクの農業政策とドイツ農業」『史学雑誌』第六九編六号。

一九六二年「ブリューニングの失脚とユンカーの役割」『歴史学研究』第二六八号。

一九六五年「欧州統合の理念と現実」『思想』第四八九号。

一九六六年 Brünings Siedlungspolitik und sein Sturz, in: *Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie*, Jg.14, H.1, S. 54-82.

一九六六～六七年「ブリューニングの内地植民政策とその失脚一・二」『史学雑誌』第七五編一二号・第七六編一号。

一九六八年 書評「松田智雄『ドイツ資本主義の基礎研究』」『史学雑誌』第七七編四号。

一九七〇年「第二帝政ドイツの政治と経済――F・Fischer と H・Boehme の問題提起をめぐって」『大阪教育大学紀要』第

二三巻、第2部門。

一九七一年「帝国主義の政治的特徴」『歴史評論』第二五三号。

一九七五年 Die Feudalisierung des Grossbürgertum, in: *Tradition und Neubeginn. Internationale Forschungen zur deutschen Geschichte im 20. Jahrhundert*, hrsg. v. Joachim Hütter, Reinhard Meyers u. Dietrich Papenfuss, Köln/Berlin/Bonn/München, S. 459-466.

一九七七年『ドイツ第二帝制史研究――「上からの革命」から帝国主義へ』青木書店。

（同）『ドイツ国民の歴史――中世から現代まで、歴史の成果』（W・コンツェ著、木谷訳、創文社、原著一九六三年）。

一九七九年「『ドイツ第二帝制史研究』の諸問題――書評にこたえて」『歴史学研究』第四七〇号。

一九七九年「西ドイツにおける『社会史』と伝統史学――ヴェーラー『ドイツ帝国、一八七一～一九一八年をめぐる論争の紹介」『歴史評論』第三五四号。

一九八五年「現代世界の展開と変動」柴田三千男・木谷勤『世界現代史』山川出版社。

一九九一年「ドイツ帝国政治体制の改革可能性をめぐって――第一次世界大戦前夜（一九〇九～一四年）の国家と社会」長谷川博隆編『権力・知・日常――ヨーロッパ史の現場』名古屋大学出版会。

（同）「ドイツ帝国と国民統合」『シリーズ世界史への問い・一〇・国家と革命』岩波書店

一九九二年「一八一三～一九一四年・解放戦争百周年記念祝典をめぐる国家と国民」『名古屋大学文学研究論集』史学、第八号。

（同）「現代歴史学論争――ドイツ近現代史の見方ととらえ方」木谷勤・望田幸男編著『ドイツ近代史――一八世紀から現代まで』ミネルヴァ書房。

一九九三年『社会国家――その成立と発展』（G・A・リッター著、木谷勤ほか訳、原著一九八九年）晃洋書房。

一九九七年『帝国主義と世界の一体化』山川出版社。

二〇〇一年『ナチズムと歴史家たち』（P・シェットラー編、小野清美・芝健介と共訳、原著一九九七年）名古屋大学出版会。

二〇一四年『讃岐の一豪農の三百年――木谷家と村・藩・国の歴史』刀水書房。

二〇一五年『もう一度読む　山川世界現代史』山川出版社。

（わかお　ゆうじ・名古屋大学名誉教授）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

木谷史学の心性――『讃岐の一豪農の三百年』への道――

望田幸男

1　教養主義を体現する最後の世代

木谷さんは一九二八年生まれで、私とはわずか三歳しか違わないが、生い立ち、教養目録、性格などいろんな点で、一言でいえば「心性」とか「パーソナリティー」の点での違いを、木谷さんに接するたびに感じて来た。そこには、わずか三歳という年齢差が大きく影響していた。つまり木谷さんは旧制第六高校理科から方向転換して東京大学文学部へと進学し、教職としては福井大学、大阪教育大学などを経て、名古屋大学の文学部教授を定年退官後、大阪国際大学教授で終わられた。ちなみに弟さんの収氏も東大農学部に進み、母校東大の農学部教授になられた。三才下の私は旧制高校への強い憧れをいだきつつも、戦後の学制改革の大変動のなかで、その憧れを満たすことができなかった（私は旧制中学四年から新制高校二年に編入された）。

この旧制の高校・大学を体験したことは、それを体験できなかった世代と比較した時、教養的心性において独特なものをもたらしている。私の故郷の甲府のような田舎都市でも、休暇となると一高をはじめ近隣の旧制高校に進学した先輩たちが帰省してきて、母校の後輩をまえにしてドイツ哲学やらマルクス主義などをドイツ語まじりにとうとうと論じるのにしばしば接した。この異質性を、ほぼ同世代であったにもかかわらず、木谷さんと会うたびに感じてきた。私が木谷さんと親しく接するようになったのは、一九六八年初頭に、関西にドイツ現代史研究会が結成されてからである。参考に創立メンバーを列記すれば、木谷勤、中村幹雄、望田幸男、末川清、野田宜雄、山口定、栗原優、飯田収治、豊永泰子の九名であり、旧制高校出身は木谷と中村だけであった。最年長の木谷さんが当時四〇歳だったから、いわば三〇歳代の結集だったといえよう。

さて、木谷さんとの距離感を旧制高校の体験の有無に求めてきたが、それは内容的にいえば、大正時代からの旧制高校を発祥とする「大正教養主義」といわれているものにほかならない。この問題については、ドイツ近現代史の畑では、つとに野田宜雄や私などのドイツ教養市民層研究との関連で意識されてきたが、日本の教養主義については、二〇年ほどまえから教育社会学者の竹内洋氏などによって精力的に『学歴貴族の栄光と挫折』や『教養主義の没落』などの著作で紹介され注目されてきた。この流れは、竹内氏の著書の表題からもうかがわれるように、いまや「教養主義の没落」の時代となり、いわばその「挽歌」を奏でているものであった。

この教養主義の制度的支柱は言うまでもなく旧制高校・旧制大学であったが、その制度的支柱を失っても、大学の教員層や学生のなかの「教養主義憧れ世代」ともいうべき層によって、一九七〇年代までは、大学のなかに生きていた。しかし、それ以降は実学主義・実用主義の大波のなかで、衰退していった。木谷さんは、このような歴史的境位に立ち至ってきた「教養主義を体現する最後の世代」を飾るひとりだったといえよう。

このことは、後述するように、木谷さんのドイツ近現代史研究、というより歴史学的関心そのものあり方にも影響していた。

2　四国のユンカー

次に着目したい点は、旧制高校への進学者のなかで有力な階層が地主層であったことである。この点については、木谷さんが亡くなられる四年前に刊行された『讃岐の一豪農の三百年――木谷家と村・藩・国の歴史』[1]の出版事情とも関連して、立ち入って後述するつもりである。

木谷さんがまだ福井大学に勤務されていたころ、日本西洋史学会の席上で木谷さんにお会いする機会があった。末川清君に「あれが木谷さんだよ。隻腕の人だ」とささやかれた。当時、私にとって木谷さんは「ユンカーの研究者」というイメージであり、四国の大地主の家系であることも仄聞していた。末川君に「四国のユンカーの末裔が、ドイツのユンカーの研究をやってるわけだな」と駄洒落めいたことをいった。加えて木谷さんが敗戦間際に、郷里高松の空襲の惨劇のなかで、左腕に焼夷弾を受け，瀕死の重傷を負われたことを知ったのも、この頃のことであった。

こうして木谷さんに対する私のイメージは、（一）教養主義の最後の世代、（二）四国讃岐の「ユンカー出身」、（三）戦時中の青春期に生命の危機にさらされた苛烈な試練をくぐり抜けてきた人、こうした三つの特色の重なり合いによって形成されるに至った。本稿で「木谷史学の心性」といういささかもってまわった表題をかかげたのも、これら三つの特色の連関のなかで、木谷さんというひとりの人間の営みとしての「木谷史学の有り様と特質」を考えてみたいと思ったからである。

この意味で、通常の学説史や研究史あるいは論争史の流れのなかで、木谷史学がどのような位置と役割を果たしたかを論じるという手法とは、本稿は縁遠い。というよりも、このような問題の立て方をあえてしたのは、いずれ木谷さんの後を追う日を迎えようとする私にとって、自分のやって来たドイツ近現代史研究なるものが、個々の個別実証や理論立てがどうであったかよりも、その営みが、自分の人生にとってどういうものだったのかを、折々考えさせられる今日此頃であるからである。

3　「木谷史学の心性」

では、以下において「木谷史学の心性」をさぐるという視点から、いくつかの特徴点を挙げ論じてみたい。第一の特徴は、木谷さんのお仕事の特徴は、限定された特定のテーマに関する論文（いわゆる雑誌論文）に事欠くわけではないが、むしろ学会動向や論争テーマのさまざまな変遷に即して、それらの多くに関していちはやく論じている点である。日本と違ってドイツの歴史学会では戦後、全国的な大論争がくりかえし重ねられてきている。木谷さんは、それらの論争の発生のたびごとに、紹介にとどまらず、それらの論争の柱になった著作や論集などの翻訳紹介をされている。いわば「現地の声」に率直に耳をかたむけられたのである。たとえば一九九〇年代末にドイツ歴史学会における「過去の克服」をめぐり学会挙げての大論争が起こったが、木谷さんはこの論争のピークとなった「第四二回ドイツ歴史家大会」にも出席し、その衝撃と主要論点を論じた論集を翻訳紹介する役割を果たされた[2]。

これは一例であるが、同様な役割とお仕事を、ドイツ史学会におけるその他の諸論争に関しても、木谷さんは果たしておられる。しかも、総じてその際の特徴は、自己の主張を前面に出すことよりも、論争点の客観的な整理に意を用いられている、と私は読み取っている。いわば、論争されている諸問題について、可能な限り広く客観的に様々な角度から

整理し紹介することを心掛けておられる、というのが私の強い印象である。

第二の特徴は、つねに歴史的諸問題を現代史的関心との関連のなかで意識し考えておられている点である。あるとき木谷さんが山川出版から『世界現代史』[3]の依頼をうけていることが話題になった。私が「えらいものを引き受けられましたね」といったところ、木谷さんも「本当にそうだよ」と笑いながらいっていたが、その後、断る気配はみせなかった。第二次世界大戦勃発までならまだしも、戦後も冷戦の終了からグローバリゼーションの展開まで説き及ぶと聞いて、私はますます「えらいものを引き受けられた」という感を深めた。

だが木谷史学にとっては、一九・二〇世紀に生起していた問題が、結局、今日どうなっているかを見届けるのが「現代に生きる歴史家」としては、突き止めておかねばならないことであった。実は、私は長い間、居住地周辺の人々（主婦や年金者、作家、元教師など）と読書会をやっているが、最近まで木谷さんの『世界現代史』をテキストにしてきた。最近、二年間かかってやっと読了ということになった。参加者の多くにとって、テキストに盛られた諸事実――とりわけ戦後史の諸事実ははじめて聞かされたということが、どんなに多くあったことか！　読了して、ため息交じりの読書会メンバーを眺めながら、私は、現代世界の流れと特質まで視野に入れながら思考する木谷史学の「心性」に思いをめぐらしたのであった。

4　『讃岐の一豪農の三百年』

さて最後に本稿のサブ・タイトルに掲げた『讃岐の一豪農の三百年』に関連した論述に進もう。本書は二つの特徴をもっている。第一は木谷家のルーツを三百年までさかのぼって、その後の変遷をたどっていることである。そのルーツの初発の姿容は「瀬戸内海に盤踞した水軍」であった。それが江戸時代には讃岐の豪農として定着し、明治維新まで存続する。以後、寄生地主・不在地主へと転成していく。そして戦後は農地改革にともない財を失う。大筋でこうした変遷を縦軸に、それぞれの各時期における具体像が描かれている。

木谷さんがこの著書を世に問われたのには、いくつかの理由がある。それは「木谷家文書」をはじめ、いわば木谷家に関する基本的な史料が保存され、さらに郷土史家などによる整理が進行し、木谷家の家系史を描ける土台が出来ていたことがある。そして、これらの史料を用いて家系史を描くべき役割が木谷さんに期待されたのである。木谷さんは折々、こんなことを漏らされていた。「日本史研究者に比べれば、われわれ西洋史家がやっている史料の扱い方は児戯にひとしい。一度、日本の史料を本格的に使って日本のことを描くことをやってみたいものだ」と。本書は、いわばこのような木谷さんの宿願と心意気の発露である。

同時に、この著書をまえにしたとき、すでに触れたところであるが、木谷さんのドイツ史研究がユンカー研究と密接に関係してきたことを想起せざるをえない。このことは、二〇一三年の木谷さんの論考「戦後日本のドイツ近現代史研究――私的体験と展望」[4]に如実に現れている。そこには、戦後ほどなく「大塚史学」の興隆のもと、木谷さんの一貫したテーマが、「ユンカー・ブルジョア国家」におけるユンカーの果たした役割の探究であったことが語られている。しかも、その作業は、新資料をワシントン公文書館からとりよせたマイクロフィルムにもとづいて行われ、さらに一九六三～六五年のドイツ留学で、一次資料の幅広い利用

によって深化され推進された。『豪農三百年』は、こうしたユンカーに関する日本人研究者木谷さんと交錯する。

『豪農三百年』を贈呈していただいた返信に私は書いた。「四国のユンカーの出身者が、とうとう本格的な家系史として四国のユンカーを自ら書くという年来の宿願を果たされましたね」と。この宿願を果たすために、木谷さんは郷土史家や日本史家によって古文書の読み方の手ほどきまで受けている。こうして彼の執念は，死の四年前に実ったのであるが、ドイツ史としてのユンカー研究の長い旅は、木谷史学の心性としては『讃岐の一豪農の三百年』に通底していたし、その到達点に達したことで終わりを告げたのである。

注

（1）木谷勤『讃岐の一豪農の三百年――木谷家と村・藩・国の歴史』刀水書房、二〇一四年。

（2）P・シェットラー編（木谷勤・小野清美・芝健介訳）『ナチズムと歴史家たち』名古屋大学出版会、二〇〇一年。

（3）木谷勤『山川世界現代史』山川出版社、二〇一五年。

（4）木谷勤「戦後日本のドイツ近現代史研究――私的体験と展望」『ゲシヒテ』第六号、六四‐七〇頁。

（もちだ　ゆきお・同志社大学名誉教授）

木谷先生との思い出

大津留厚

私が木谷先生と初めてお会いしたのは一九八四年の秋の事でした。それは大阪教育大学天王寺校舎の薄暗い研究室の中でした。それが木谷先生の研究室だったのか、東洋史の寺広氏の研究室だったのか定かではありませんが、木谷先生が名古屋大学に移られるに当たって行われた後任人事の面接の場でした。幸い私は木谷先生の後任として採用されて大阪教育大学に就職することになって、初めて関西の地に住むことになりました。当時の大阪教育大学の西洋史の教員は池田校舎と天王寺校舎で授業を持っていたので、その間を取って豊中に住むことになりました。偶然ですが木谷先生も豊中に住まわれていたので、名古屋大学に移られた後もいろいろと気に掛けていただきました。東京では大学院に入学以来西川正雄氏が指導教官だったのですが、その元を離れて関西に移り住んだ時に木谷先生はいわば関西での指導教官ということになります。

木谷先生は教職に就かれた経験をお持ちで、そのあとも教員養成系の大学での勤務が長かったので世界史教育への強い関心から、正に「新しい」世界史教科書の執筆に取り組まれました。木谷先生がこの『新世界史』で学ぶ高校生たちに伝えたかったことは、世界はあるいは世界史はつながっている、ということだったのではないでしょうか。『新世界史』の「はじめに」の「本書の構成」は「そこで本書では、つぎのような見方に立って全体が書かれている。まず、われわれが世界史を考える出発点となるのは、各地域の動きがたがいに影響しあいながら緊密な一つの世界をなしている現代である。その一体的な世界とは、固有な文化を持つ異質な社会が複雑に作用しあう場であり、しかも、それらの社会の関係は、決して平等な政治的・経済的な条件のもとにはおかれていない（第一五章以降に相当）[1]」と述べられています。もちろんこの教科書も柴田三千雄、弓削達、辛島昇、斯波義信各氏との共同執筆であり、「はじめに」がその共通の認識を示すものであることは事実ですが、正に第一五章以下最終章となる第一七章までを執筆したのが木谷先生である以上、先生の思いが伝わる文章であると思います。この思いは、『新世界史』創刊間もなくして出された『世界現代史』にも、また二〇〇九年に出された『もう一度読む山川世界史』にも読者の対象を広げながら一貫しているのではないでしょうか。

私自身は一九九七年、震災の傷跡がまだ残る神戸大学に移りましたが、『新世界史』が装いを新たにする作業に加わらせていただくことになりました。そのための編集委員会は山川出版社の会議室の円卓で行われたのですが、談論風発して楽しいものでした。しかし二〇〇一年六月八日の編集会議は少し違った雰囲気の中で行われました。その編集委員会が午後に開かれることになっていたので、私は午前中の新幹線で大阪から東京に向かったのですが、電光掲示板に映し出されたニュースは大阪教育大学付属池田小学校で起きた児童殺傷事件の一報を伝えていました。次第にその全容が明らかになるなかで行われた編集会議は、木谷先生と私が大阪教育大学の関係者ということで、重苦しいものになりました。『新世界史』自体は『詳説世界史』の圧倒的なシェアの前に撤退を余儀なくされました。それも仕方のないことでしたが、木谷先生にはこの教科書に強い思い入れがあったのでは、と今でもお力になれなかったこと

を申し訳なく思っています。

木谷先生が取り組まれたことの一つにドイツの学会動向を的確に把握して紹介するというお仕事がありました。その一つが一九九八年九月にドイツで行われたドイツ歴史家大会の詳しい紹介でした。この歴史家大会はいわゆる歴史家論争たけなわのころに開かれました。歴史家論争とは、第二次世界大戦後のドイツを主導した歴史家たちの多くがナチ期に何らかの形でナチズムにコミットし、そのことに口をつぐんできたことへの告発でした。中でも木谷先生が師と仰ぐW・コンツェが批判にさらされました。木谷先生はゲッツ・アリの批判を以下のように紹介しています。「コンツェが三九年ブカレストで開催予定――大戦のため中止――の国際社会学大会に提出した報告『ポーランドの農村過剰人口』では農村近代化の前提としてポーランド人農民の階層分解を促進するため農村・小都市市場を支配するユダヤ人小商人・手工業者の除去を提案していたし、また四三年ポーゼン大学で講師採用のため行ったテスト講義（中略）でもプロイセン農民解放や営業の自由を引き起こした社会の変動よりも、むしろそれに伴い起こった農村の民族構成の変化――とくにユダヤ人の進出が強調されていた[2]。そのうえで彼らの教えを受けた世代の反論、あるいは新聞紙上で展開された社会的反響も踏まえて、木谷先生は、歴史家を含むドイツ教養市民層がナチズムと深い「親和性」を持ったことを前提としたうえで、なお「今のところ、センセーショナルな事実の発見の衝撃が先行しているが、これが鎮まった後、問題を継続的に深め、得られた成果＝反省を学問的に定着させるためには、速断や一面化を避け、時代背景や事実の細かい差異を弁別していくことが必要であろう」と述べ、問題をあいまいに終わらせる可能性があることも承知の上で慎重な扱いを求めています。それは木谷先生の学問的営為の帰結と言えるだろうが、やはり恩師コンツェへの人間的な心遣いだったのではないでしょうか。

二〇〇八年度のドイツ現代史学会を神戸大学で開くに当たって、その年の一月に他界された西川正雄氏の追悼のシンポジウムを行うことにいたしました。東日本と西日本のドイツ史研究者の交流に腐心された西川氏を悼む場としてこの学会が相応しいと考えたからです。しかし同時に実存的な世界史の中でドイツ現代史研究を志向した西川氏を悼むのは、やはり真摯な議論を通じて初めて可能になるのではないかと考えて、木谷先生にその役をお願いしたのですが、先生は快く引き受けて下さいました。木谷先生が西川氏の仕事の中で最も評価したのはやはり『ファシズムとコミンテルン』でした。「一九六〇・七〇年代、気鋭の若手研究者、西川・富永・鹿毛・下村の四人が共同研究で取り組んだのがこの経過すなわち「コミンテルンによるファシズム分析の歴史、または裏から見た統一戦線史」（まえがき）で、その成果が」『ファシズムとコミンテルン』であったとしたうえで、「この共同研究をつうじて西川さんは自らのファシズム理論をつくりあげた。それはファシズム体制の成立を伝統的支配階級の「権威主義的反動」と中間層を主体とする大衆運動の「疑似革命」が抗争しつつ提携するという基本構図で説明する」と指摘しています。しかし木谷報告のそもそもの題は「西川史学と『現存社会主義』」でした。木谷報告は「西川さんの幅広い研究分野の中核をなしたのは、一九世紀末以降ヨーロッパの国際社会主義運動の歴史であるが、そこで繰り広げられた革命、戦争、平和をめぐり国際労働運動の諸潮流の間に繰り広げられた交渉や対立、成功や挫折についての深い知識、苦渋や感動の

追体験が西川さんの研究及び実践でのねばりづよい活動を支える知恵と情熱の源泉になったと思われる」、と西川氏の研究と実践に理解を示したあとで、「そしてこの労働運動への深い共感がさらに氏をソ連をはじめ「現存社会主義」へのさまざまな批判とともに捨てきれぬ期待と思い入れに導いたといえよう」と、述べています。しかしこの報告の最後にもう一度この問題を取り上げ、西川氏のソ連社会主義への共感の根幹がその植民地への取り組みにあることを指摘しています。木谷報告は西川氏の『社会主義インターナショナルの群像　一九一四‐一九二三』から以下の文章を引用しています。「しかし〝加入条件〟の第八条の『植民地と被圧迫民族』に関する文章には、ベルン会議の人々のような『家父長的』態度はほとんど見られない。さればこそ、コミンテルンは、非ヨーロッパ世界で圧倒的な支持を得たのであろう」（傍線‐木谷）」。そのうえで、ホブズボームを引き合いに出して、「西側」先進諸国で共産主義に同調する知識人の一人として史学史的な位置づけを行って報告を終えています。[3] この報告は聞くものをして、もしその場に西川氏が同席していたとしたら、どんな「反論」が聞けたのだろうかという宿題を残し、その意味で深い余韻を残すものでした。

　木谷先生のお住まいは地下鉄御堂筋線と相互乗り入れしている北大阪急行線の終点千里中央から一つ手前の桃山台にありました。私は震災のあと千里中央近くに住んでいました。木谷先生は大阪国際大学をお辞めになったあと時々千里中央にあるピーコックストアに買い物に来られました。私もよくそこで買い物をしたので、そこで出会うことがありました。そうすると阪急百貨店の一階にあった喫茶店でコーヒーを飲みながら、買い物袋を脇において、よもやま話に花を咲かせました。木谷氏はちょうど取り組んでおられた讃岐の木谷家文書のことを話され、私は青野原俘虜収容所研究のことをお話しました。そこに至る道のりは違っていても、ヨーロッパ史を研究してきた私たちが足下に見出した「現場」を自慢しあうという至福の時間でした。心よりご冥福をお祈りいたします。

注

（1）『新世界史』山川出版社、一九八四年、三頁。

（2）木谷勤「ナチズムと歴史家たち――一九九八年ドイツ歴史家大会の話題をめぐって」『ドイツ研究』第二九号、一九九九年、八七、八九‐九〇頁。

（3）木谷勤「西川史学と「現存社会主義」」『ゲシヒテ』第二号、二〇〇九年、九七‐九九頁。

（おおつる　あつし・神戸大学名誉教授）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

名古屋大学での木谷先生

――私の見た先生の授業の「思い出」――

棚橋信明

1　はじめに

木谷勤先生との出会いは、私にとってはとても幸運なものであった。先生が名古屋大学文学部に来られたのは一九八四年一〇月で、その年の三月に定年退官されたドイツ中世史の先生の「後任」としての着任であった。私はこの時、学部の三年生であった。テーマはまだ明確ではなかったが、ドイツ近現代史を専攻するつもりでおり、卒業後は大学院に進学する希望も抱いていた。私はこの思いがけない人事によって、将来のドイツ史研究における厳しくも温かい導き手を得ることになったわけである。そして、その七年半後、先生が名古屋大学を退官された一九九二年三月に、私も大学院を満期退学することになった。

以下では、私が見た木谷先生の名古屋大学での授業の様子を、先生の進められてきた歴史研究と関連づけながら思い起こし、最後に先生への感謝の言葉を述べることにしたい。先生が積み重ねてこられた多様な分野におけるご研究の意義について、的確な言葉で語れるような才覚を、研究者としても凡庸な私はもちあわせていない。私のできることは、先生が名古屋大学の講義や演習で見せられた「素顔」を、個人的な「思い出」として文章に残すことぐらいである。私の手元には三〇年以上も前の手書きの講義ノートや授業の資料を挟み込んだファイルが残っており、これらを参考に記憶を呼び起こしていきたい。

2　講義「ドイツ現代史の諸問題」と『第二帝制史研究』

木谷先生が名古屋大学で開講された講義で私が受講したのは、一九八四年度後期に「ドイツ現代史の諸問題」、一九八五年度に「ヨーロッパ現代史」、そして大学院に進学して一九八七年度に「第一次世界大戦の研究――総力戦下のドイツ帝国――」であった。赴任されてすぐに開講された「ドイツ現代史の諸問題」は一九七七年に出されたご著書『ドイツ第二帝制史研究――「上からの革命」から帝国主義へ――』をベースに、そして「ヨーロッパ現代史」は一九八五年に柴田三千雄氏と共著で出された『世界現代史』の草稿の一部をもとに講じられたようである。他方で、「第一次世界大戦の研究」は、『第二帝制史研究』の最終章「第二帝制末期における支配体制の動揺」で取りあげられた諸問題を、その後の研究成果も取り入れつつ敷衍するものであった。

これらの講義における先生は、穏和ではあったが、前方を見据えて、はっきりとした口調で受講者に語りかけるといったスタイルであったと思う。授業の進行は比較的坦々としていた印象もあるが、当時の私の講義ノートを見返すと、どの講義もぎっしりと内容のつまった講義であったことが分かり、ノートを取りながら講義の内容を懸命に追っていた自分の姿が思い浮かび、また、今日の自分のドイツ近代史についての理解が、学部学生時代に受けた先生の講義によって大きな影響を受けていることを改めて痛感する。なかでも先生が名古屋大学に赴任されて最初に開講された講義「ドイツ現代史の諸問題」は、私にとってかなりインパクトがあり、記憶に残るものであった。

この講義を受講した当時の私は、おそらく歴史学の何たるかもわかっておらず、その目的や意義に関する理解も浅かった。それでも、先生

の『ドイツ第二帝制史研究』が日本のドイツ史研究の動向に一石を投じるきわめて重要な研究であり、大きな反響を呼んだものであったことはすでに知っていた。折良く一九八四年一月に出版された西川正雄編『ドイツ史研究入門』には、先生の著書についての言及が各所にあり、「経済過程と政治過程の有機的統一的把握を意図した研究」と紹介されていた。もちろん当時の私には、こうした評価の意味を完全に理解することは不可能であった。それでも私は、この本を図書館から借り出してコピーをとり、何度も読み返しては、講義の内容の把握に努めた。

しかし、その理解は、にわか勉強では到底間に合うものではなかった。初日の講義は、歴史家は「知的認識の枠組みとしてのパラダイム」をもつものである、といった話から始まった。そして、それに続けて先生ご自身の大学院時代からの研究略歴が語られた。大塚史学の影響下で取り組んだニーダーラインの繊維工業に関する経済史研究が、思いがけず大塚理論の「反証」につながったこと、その後、経済史と政治史の接点に関心が移り、ビスマルクの経済政策とユンカーの経済的利害の問題に取り組んだこと、それから、ナチスの政権獲得におけるユンカーの役割の問題を追究するうちに、最初の大統領内閣を率いたブリューニングの失脚に関する新資料を発見し、これによりユンカーの役割を過大に評価する通説の誤りを証明できたことなど、ここではハイデルベルク時代までの先生の歴史研究の歩みが語られたのであった。そして最後に、先生ご自身のパラダイムの中心には「近代化」と「資本主義化」の問題のあることを述べられ、第一回の講義を終わられた。

つづく二回目の講義で教壇に立たれた先生は、冒頭に〝Deutscher Sonderweg〟と大きく板書され、その日の講義のテーマを示された。そして、H・U・ヴェーラーの著書 *Das Deutsche Kaiserreich*（一九七三年刊行）について説明を始められた。まずヴェーラーが同書によって描き出そうとした「ドイツの歩んだ独自の不幸な道」の基本的な観点に関する説明があり、J・コッカやW・J・モムゼンらと創設した社会科学としてのGesellschaftsgeschichteの特徴に関する説明が続いた。先生がハイデルベルク大学で師事されたW・コンツェやTh・シーダーの「構造史」が、「歴史主義」の延長線上にSozialgeschichteを位置づけ、展開していったのに対して、Gesellschaftsgeschichteはマルクスやウェーバーの理論を積極的に取り入れ、適用することにより歴史的事象の一般化や法則性を追求し、それゆえ、歴史的事象の個別的特性を尊重する「歴史主義」を擁護する保守的歴史家から激しい批判を浴びた、とする説明であった。さらに、イギリスの「左派」の歴史家からは、ヴェーラーらがイギリスの民主主義的発展を過大評価し、それを模範として「特有の道」を描いていることについて厳しい批判が出され、激しい論争に発展していったことについて語られた。

こうしたドイツの学界動向に関する解説は、次の三回目の講義まで続くことになった。そこでは、戦前に社会科学的手法によって「歴史主義」の主流派から異端視されたE・ケーアやG・W・F・ハルガルテンの研究も紹介され、また、M・ウェーバー、W・ゾンバルト、そしてF・エンゲルスなどの歴史学の発展に係わる重要な功績に関する説明もあった。木谷先生はのちに、概説書『ドイツ近代史』（一九九二年刊行）の「補章」として、「ドイツ現代史論争――ドイツ近代史の見方ととらえ方――」と題する論稿を発表されているが、その大半の内容はこの時すでに準備されていたことがわかる。そして、この講義の最後に先生が持ち出されたのは、受講者の意表を突いて「日本資本主義論争」の論点であった。ここで、「後発資本主義国に共通する問題」を解明するうえ

での〝Sonderweg〟論の有効性について問題を提起されたのである。先生は、この問題について論文等では直接的に論じられることはなかったが、近代ドイツと日本との比較史の観点は、つねに意識しておられたようである。

そして、翌週の講義は〝Revolution von oben〟をテーマとされた。この講義も、「ブルジョア革命」の概念の説明で始まり、ドイツ資本主義に関する松田智雄氏の「二重構造」論や大野英二氏の「資本類型論」の解説が続き、かなり重厚な内容であった。次の五回目の講義から、ようやく一九世紀初頭からドイツ帝国の創設にいたる通史的な説明が始まった。通史的説明は先生が独自に理論化された「上からの革命」論と「ボナパルティズム」論を駆使するものでもあり、難解なところも多かったが、プロイセン憲法紛争におけるビスマルクの登場やエムス電報事件から独仏戦争の開戦にいたる過程についての先生の語り口は、かなり軽妙であったと記憶している。

ヴェーラーも「上からの革命」と「ボナパルティズム」の概念をもってドイツ帝国の成立と特質について説明しているが、木谷先生の用いられた概念は、同時代人のエンゲルスの観点により忠実であって、私見ではあるがドイツ近代の発展を政治と社会の相互関係においてダイナミックに捉えるのにより有効と思われる。思い起こせば、先生は大学院の演習などで歴史を突き動かす「ダイナミズム」といった言葉をよく口にされ、それを解き明かすことが歴史研究の一つの醍醐味である、といったことを述べられていた。また、歴史の発展を固定的に見ることによって、多様な「発展可能性」を見落とすことの危険もたびたび指摘しておられた。直線的に見える発展にも、ところどころに別の道につながるようなさまざまな「発展可能性」が隠されており、それを見逃すことで真の「ダイナミズム」が捉えられなくなる、といった趣旨であったと思う。先生のヴェーラーに対する批判も、このような立場によっていた。ヴェーラーの描くドイツ近代は、一定の法則に従って「すべての人が操り人形のように動いているかのよう」である、と批判を口にされていたことを思い出す。

3　史料講読「帝国主義の諸問題」と『世界現代史』

それでは次に、先生が演習の授業でどのような問題を取りあげられたのかを思い起こしてみたい。演習形式の授業として先生が最初に開講されたのは、一九八四年度後期の史料講読「帝国主義の諸問題」であった。第一回の授業では、imperialism の語源と、その後の用語法と概念の歴史に関する説明があった。そして、二回目の授業から、G・リヒトハイムの著書『帝国主義』（原著一九七一年刊行）の「第五章 自由帝国主義」と、J・ロビンソンとR・ギャラハーによる論文「自由貿易帝国主義」（原著一九五三年発表）をそれぞれ日本語訳で読み進めた。テキストは今ではまったく見かけることのなくなった「青焼」で配られた。翌年度には同じタイトルの史料講読が通年授業として開講され、西洋史専攻の学生はこれを前年度からの継続授業として履修した。この授業ではW・J・モムゼンの著書 *Imperialismustheorien* の中の幾つかの章をドイツ語で読み進めた。同書は一九七七年に Kleine Vandehoeck-Reihe の一冊として出されたもので、比較的平易な文体で書かれてはいたものの、六〇年代の「従属理論」にいたる多様な理論が濃縮して説明されており、われわれ学部学生にはそれほど容易に読み解けるものではなかった。

このような史料講読のテーマの設定と文献の選択は、すでに言及した

『世界現代史』の執筆を通じて、先生が世界史像の再構築の必要を強く意識されていたことに深く関係していたと思われる。先生が『世界現代史』の執筆を引き受けられたのは、共著者である柴田氏に請われて、としか私は聞いたことがない。いずれにせよ、それ以前に木谷先生は、柴田氏を執筆代表とする山川出版社の高校世界史教科書『世界の歴史』と『新世界史』の執筆者に加わっており、その縁によるところが大きかったと考えられる。また、名古屋大学に赴任される以前に、教員養成学部で長く教鞭をとられていたことから、「歴史学研究会」などでも熱心に取り組まれた「世界史像の自主的形成」の課題にも、関心を抱き続けておられたことも十分に考えられる。

『世界現代史』の全体を貫く基本的な枠組は、その「まえがき」で明示されているように、I・ウォーラーステインの「世界システム論」に依拠しており、近現代世界をまとまりをもった単一のシステムとして説明しようとするものであった。木谷先生が執筆を担当されたのは、二部構成の第二部で、帝国主義によって資本主義的世界体制ができあがる一八八〇年代から、一九七〇年代までであった。とくに第二次世界大戦以降の資本主義世界の複雑な展開は、それまでわが国で影響力を保持していたレーニンの帝国主義論では説明が困難であった。すなわち、帝国主義を独占資本主義に達した資本主義の発展の一段階と見なし、それを列強の暴力的な対外膨張政策と結びつけて考えるだけでは、現代世界の理解に限界のあることは明らかであった。史料講読の授業で先生が、ロビンソンとギャラハーによる「自由貿易帝国主義」を取り上げたのも、このような問題意識と関係していたと考えられる。この論文は、一八七〇年代以前の自由貿易の推進による帝国主義の展開を指摘するもので、その理論は長期的な視野で帝国主義の問題を捉えることを可能にするものであったからである。

このように木谷先生は、帝国主義の理論的射程を大きく広げることを模索しておられたようであるが、帝国主義の展開における社会主義の位置づけについては明確にされなかったようである。それには、先生の資本主義に対峙すべき社会主義への強い「思い入れ」のようなものが大きく影響していたと私は思う。『世界現代史』において、社会主義体制が資本主義体制と並列的に説明されているところがある。ウォーラーステインに従えば社会主義も資本主義的世界体制のなかで機能しているに過ぎないことになるはずであるが、資本主義世界から「離れ孤立したソ連」とされているところがある。このような表現は、二〇一五年に単著として出された『もう一度読む 山川世界現代史』にもそのまま残されている。これに関連して現在でも強烈な印象として残っているのは、大学院のゼミの際に先生が述べられたゴルバチョフのペレストロイカに寄せられた大きな期待である。アメリカのニューディール政策で世界的危機に陥った資本主義が再生したように、ペレストロイカによって社会主義が息を吹き返すこともありうるのではないか、といったことを述べられた。これは一九八七年ごろの発言ではなかったかと思う。

木谷先生は、社会主義体制も単一の世界システムに包摂されるものと理解しながら、社会主義の原理にある種の独立的機能を見て取っていたようである。そのような見解は、ソ連と東欧の社会主義体制が倒壊したあとも堅持されていた。一九九二年三月の退官時の最終講義は「二〇世紀をどうみるか――世界戦争・世界革命・大衆民主主義――」のタイトルで行われたが、そのときに先生が作成され、配付された「二〇世紀年表」では、一九一四年以降のアメリカ・西欧とソ連・東欧の出来事が相対して並べられていた。この講義で先生は、ソ連・東欧の社会主義が直

面したさまざまな困難について説明したうえで、アメリカ・西欧型の民主主義体制は目標を達成することによって勝利したわけではなく、社会主義体制の自壊によって「勝ち残った」にすぎないことを強調された。また、これまで資本主義体制は、それに対抗する社会主義の原理によって暴走が抑制され、さまざまな修正を強いられてきたのであって、社会主義がこのような力を失ってしまった今、資本主義に対抗する新しい力の出現を期待したい、といったことを述べられて最後の講義を締めくくられたと記憶している。アル・カーイダやＩＳの思想的基盤であるイスラム原理主義にこうした役割が期待できないのは明らかであり、他方で近年のトランプ政権に代表される自国第一主義の台頭やイギリスのＥＵ離脱の動きなどは、最終講義で先生が示唆された懸念が的中したものと言えないだろうか。

4　おわりに――ドイツでの個人的「思い出」と謝辞――

これまで記してきた木谷先生の授業の内容は、私の講義ノートなどにより再構成したものであるが、私の後付けの理解もかなり含まれており、正確さを欠くところもあろうかと思う。そのほか引用した先生のゼミ等でのご発言についても、細かな点で私の記憶違いがあったり、個人的印象に引きずられているところがある点についても、ご容赦いただきたい。そして、ここでは最後に、一九九二年八月のフライブルクでの先生との個人的「思い出」について触れ、これを先生への感謝の言葉とさせていただきたい。

私は二七年ほど前のこの時、フライブルク近郊の田舎町で、ゲーテのドイツ語コースを受講していた。早朝、ご夫妻で宿泊されていたフライブルクのホテルのロビーで待ち合わせ、その後トラムとバスを乗り継ぎ、最後はロープウェイで標高一二〇〇メートルを超えるシャウインスラントの山頂まで登った。一時間半ほどの行程であったかと思う。山頂は肌寒く、薄着でやってきた私に先生はご自分のウールのベストを貸してくださった。天気は良好で、山頂からのシュヴァルツヴァルトの展望は素晴らしかった。その後、レストランで昼食をご一緒し、広大な牧草地の広がる山頂付近をしばらく散策してから帰途についた。その時の会話で印象に残っているのは、私の体調を気遣ってくださった奥様の言葉と、ご夫婦のごく自然な掛け合いがとても新鮮に感じられたことである。先生は名古屋大学をご退官されるころから、夏季休暇を利用して奥様と一緒にドイツを旅行されることが多かったようである。この時は、私のドイツ語研修に合わせて旅程を調整され、授業のない週末に左記のような観光に誘ってくださったのだと思う。先生ご夫妻とのひとときは、私がその後、ケルンで留学生活を続けるうえで大きな励みとなった。

それから先生とは、時おり学会でお目にかかるのみであったが、最後にゆっくりとお話ができたのは、二〇一二年五月に開催された西洋史学会大会の折りであった。それは、先生が宿泊されていた御茶の水のホテルのロビーでの、奥様を交えての束の間の歓談であった。いつも優しい笑顔を浮かべながら、寛容さと厳しさをもって私に接してくださった先生への感謝をもって、本稿を閉じたい。

（たなはし　のぶあき・横浜国立大学教授）